

やま と

邪馬台 三国志

邪馬台国の国々



神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

神仙の国・蓬莱郷づくり、水田稲作、常世づくりから、
邪馬台国の興亡、大和朝廷成立に至る歴史物語と解説

前五世紀から倭国大乱前まで、那珂つ国と天之国、オロチ敵之國、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が続いた。大乱後、南九州に逃れた倭奴国末裔と邪馬台国が覇権を争った末に、大和朝廷が興った。

この間、神仙の国・常世づくりなど魂の再来、古の善政再現、水田稲作、孫子の「戦わずして勝つ」の実現にしのぎを削ってきた。

◇邪馬台国の国々

- ① (帯方) 郡より倭に至るには、海岸に沿って水行し、韓国をへて或いは南し、或いは東して、その北岸狗邪韓国に至るまで七千余里。
- ② はじめて一海を渡り、千余里にして対馬国に至る。
- ③ また、一海を渡ること千余里、・・一大(支)国に至る。
- ④ また海を渡り、千余里にして末盧国に至る。
- ⑤ 東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。
- ⑥ 東南して奴国に至るまで百里。
- ⑦ 南して投馬国に至る、水行二十日。
- ⑧ 南して邪馬台(臺、台)国に至る、女王の都する所にして、水行十日、陸行一月。
- ⑨ 次に奴国ありて、これ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国ありて、男子を王と為す。女王に属さず。
- ⑩ 其の八年、太守王頌、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯・鳥越などを遣わして郡に詣らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よって詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告諭す。

☆第二次大戦後、新政権の興った中国では、「史記」から「明史」に至る二十四史の整理・出



版事業が始まった。この事業は中華書局と大学の連携の下、一字一句まで吟味されて四半世紀後に完成した。従って、「倭人伝」の語句は、余ほどの理由がない限り一句一字たりとも違えるべきでない。

①⑥を地図上で追っていくと、末盧国は唐津、伊都国は佐賀平野、奴国は筑後川南の旧山門郡・旧大和町辺りに到る。伊都国のあつた佐賀平野には、後世の国府が置かれた旧大和町、徐福を祀る金立神社、吉野ケ里遺跡がある。

⑦、⑧については、狗邪韓国を起点にとると、本書の筋書き通り、投馬国は宮崎県西都市妻地区、邪馬台国は奈良盆地の大倭に到達する。

ここにある対馬、伊都国、邪馬台、倭、大倭、投馬については、同じ漢字、同じ読み地名・国名が「記紀」や現地名にもあり、対馬、伊都・巖、倭・日本・大和・山門、大倭・大日本、妻・都万と呼ばれてきた。対比してみよう。

対馬国↓長崎県対馬 伊都国↓「記紀」の伊都之尾羽張神・伊都之尾羽張劍・巖姫

邪馬台国、倭↓「記紀」の倭・日本、奈良県の大和国、筑後川南の旧山門郡・旧大和町

大倭↓「記紀」の大倭・大日本、奈良県の大和神社 投馬↓西都市妻、西都市の都万神社

双方を見比べてただけでも、これら現地名が史実に基づくのは明白だ。裏返して言うと、「倭人伝」や「記紀」の信憑性は、想像以上に高いことになる。

これを踏まえた上で、この時代の歴史について、このように考えた次第だ。

大乱前、日隈ひぐくま(熊野家)の伊奘諾は、北九州に都する倭奴国(倭国十豊葦原中つ国(奴国)、天地)あめつち王朝の六代女系天神・天之尾羽張神から東方統治と神国・常世づくりを任されたが、四苦八苦し

てきた。将にその時、常世思想に加えて仏教や学問に並外れた才のある大穴持が豊葦原中つ国王にのし上がってきた。伊弉諾はその噂を耳にするや、天竺を凌ぐほどの常世づくりを実現したいと願うあまり、彼を養子に、ついで向津姫（六代天神の宗女）の婿養子に迎えた。さらに皇太神に据え、東の副都である月の都（唐古）統治を任せきった。

だが皇太神は、三輪大物主と組んで邪馬台国を建て、天照大神と称して北九州を席卷した。その結果、伊弉諾も向津姫・素戔嗚も、熊襲の日向に逃げ落ちる他なかった。

一九〇年前後、向津姫が高千穂宮で天照大御神に、ついで日の天神・日神に担がれると、臣下らは石窟戸前で真経津の八咫鏡を铸造して、天璽として奉獻した。一方、素戔嗚は新羅に出走後、出雲に乗り込み、熊野家と豊葦原中つ国の再建に奮闘してきたが、志半ばで頓挫した。

二一〇年代前半、素戔嗚実子の大己貴（大穴持襲名）は、葦原中つ国を再建するや、越（高志）オロチ族と一緒に邪馬台国を攻め立てたが、二二〇年代初め、日神と高皇産霊（高千穂宮に赴く天照大神）が組んで送り出した遠征軍に戦わずして跪き、天神の御子に国譲りすると誓わされた。二二〇年代前半、日神が天孫火瓊瓊杵に熊襲吾田への降臨を命じた直後、天照大神は天孫天火明（天照大神実子、二代垂仁）を連れて大倭に舞い戻り、彼に日高見国を建てさせた。続いて丹後と尾張を統治させ、さらなる東への領土拡大も下命した。

夫の跡を追い、日神も大倭に向かったが、その途上で夫が急逝した。大倭入りして大葬を終えた日神が女王ヒミコに立つと、素戔嗚は卿、大己貴は太夫となって女王の国づくりを奮闘した。

一方、火瓊瓊杵は吾田の笠沙宮で木花開耶姫に婿入り後、西都市妻に遷り、投馬なる国を構えた。二二八年、ヒミコは魏に朝貢した。その数年後、火瓊瓊杵と争い始めた最中に、天火明が謀反を企てたが失敗して日高見国ともども常陸に走った。その後、女王は火瓊瓊杵と和睦してその児・海幸彦（火照、火明・饒速日を襲名）を呼び寄せ、天火明の家督相続や日本家建国を命じた。

結局、大倭唐古に都した邪馬台国は、天照大神率いるオロチ敵之国王朝から、女王ヒミコが纏向に都する天（厳）之国王朝に、次に火明饒速日（三代垂仁、日本大物主大神）が天神に立つ日本朝に移ったが、三世紀末、日向から東征してきた磐余彦（火瓊瓊杵の曾孫）軍に敗れ去った。

【纏向遺跡】（奈良県桜井市）、三世紀前半、纏向に突如として巨大都市が出現した。その大きさは四平方キロメートルに及び、唐古・鍵や吉野ケ里を凌いで邪馬台国時代の最大都市に発展していく。それが四世紀初めになると、衰退に向かった。

その区域は琵琶湖以南の南近畿一帯、すなわち滋賀県や京都府の南方、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県の全域、さらに兵庫県南東部に及び、七万戸（約四〇万人）もの人口を擁していた。当時の河内には、大きな内海が上町台地（大阪城辺り）から生駒山麓にかけて広がっていた。淀川上流の宇治には巨椋湖があつて、その北に琵琶湖が横たわっていたから、邪馬台国はさながら大きな島のごとく思われてきた。

磯城の三輪近辺に目をやると、三輪大物主が太氏と共立した大神家おおみわが邪馬台国の筆頭家を勤めてきた。天照大神はこの三輪氏と太氏、水神・火神を奉る瑞穂の大神家に君臨して、天叢雲剣を天璽にかざしながら水天神、天叢雲、倭大物主、大蛇と語り、天皇のごとく振る舞ってきた。かつて倭と太氏が共立した大倭家は、大乱前まで月の都に副都して東方統治に励んできたが、

大乱が起こるや邪馬台国側に寝返って天照大神に尽くす一方、伊弉諾嫡子の蛭児えびす（蛭子）を商売繁盛の神と称えて迎え入れたことで、租税の徴収と管理、国々の市場監察など大役を賜った。

「倭人伝」、「租賦を収むるに邸閣あり。国国に市あり。有無を交易し、大倭をして監せしむ」
☆蛭子にちなむ恵比須神社（桜井市三輪）も、箸墓辺りの大市の地名も、この市に由来する。だが二二〇年代前半、日神が女王ヒミコに立つや、煙たがられて一切の要職にありつけなかった。

次に日本朝が興ると、火明饒速日に取り入って絶対服従を誓い、家名も大日本家と改めた結果、一転して軍事筆頭職を拝命した。さらに唐古や葛城に都することや、天皇と語ることも許された。河内では、南国から舞い戻った天兒屋が生駒山麓に領地を賜り、女王の祭祀全般を助けてきた。攝津と播磨には、豊葦原瑞穂国や国主取り替え癖のある三島鴨族が深く広く根を張っていた。豊葦原瑞穂国は、かつて豊葦原中つ国が淀川中流域に興した分家だったが、大乱中に本家と絶縁して瑞穂の邪馬台国方に寝返った。その際、中つ国を瑞穂国に変え、忠誠心を誇示してみせた。一方の三島鴨族は、火神面足神を六代倭王に担ぐほどに栄華を誇ってきたが、伊弉諾政権に移るや右往左往し始めた。当初は大山祇神、次に伊弉諾末子の火軻遇突智ほのかぐつち、再度大山祇神を担ぐもの、大乱後に天下が入れ替わるや、天照大神・天火明・大己貴に鞍替えした。ついで日本朝が興ると、火明饒速日と共に上洛した溝クイ耳を家長に担ぐことで、再度、蘇ってきた。山陰道入口の丹後では、海神から天照大神に鞍替えした丹後海部家が踏ん張っていた。尾張でも、海部家本家が所領を守り抜いてきた。両家は豊国と共に豊葦原中つ国にとつて代わると、その中興の祖で火神の厳香来雷かぐつちの名をもじり、我が嫡子に鹿兒山かご、香具山かこと語らせてきた。大乱前の出雲では、豊葦原中つ国が豊国と喧嘩別れる寸前にあつた。大乱が鎮まる一八〇年代末、素戔嗚は熊野家や豊葦原中つ国を再建すべく出雲に乗り込んだが、大己貴に妨害された。その結果、豊国は出雲を去つて丹後・丹波、摂津、尾張に引き上げた。その後の葦原中つ国では、大己貴が大国主、葦原醜男と称して高志のオロチ族を率い、邪馬台国を攻め続けた。

福岡平野の那珂川流域では、古の那珂つ国を継承した中つ国勢が言葉巧みに言い寄ってくるよそ者を追つ払って、先祖伝来の所領を堅持してきた。

「仲哀紀」、「天皇、・・・畿な県あがたに到りまして、因りて橿日宮（福岡市）に居します」

から鉄刀や鉄剣、畿内系・吉備系の土器が多々出てくるのは、これがためだ。

「倭人伝」、「伊都国に到る。・千余戸あり。世よ王あるも、皆女王国に統属し、郡使の往来に常に駐まる所なり」、「女王国以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。諸国、これを畏れはばかる。常に伊都国に治し、国中において刺史の如きあり」

一大や老の語が隠し言葉であるのは、容易に察しがつく。魏では、天(天子を指す語)や臺(天子が政を行う御殿)は天子のみに許される漢字だった故、「倭人伝」の編者は天を一大に、臺を老にあてる他なかったのである。

この地は南国の動静がいち早く察知できる上に、万が一、熊襲が北進して来ても筑後川で遮ることができた。この城郭の人々は將軍の指図に従って河や湖沼を船で巡回しながら、近隣集落の管理に当たってきた。対馬や老岐を通じて大陸との往来がある際は、そのつど唐津や那珂津に向き、送迎や荷の点検を行ってきた。

唐津辺りにあった松浦国は大陸との中継地として栄えてきたが、田畑が少ないことで四千戸の家々しかなかった。多くの人は海沿いの狭い土地にへばりつき、専ら漁業で生業を立ててきた。

伊都国の東南百里には、戸数二万ほどの(倭)奴国があった。この国は、倭奴国王朝の官民や那珂川流域の中つ国勢が伊奘諾を慕って南下する中、山門郡・大和町辺りに足止めされ、やむなく立てた主無き国だった。そのため、「倭人伝」に奴国と記された。その真意は倭奴国にあった故、山門郡・大和町の地名が残ったというわけだ。他の倭奴国分家も那珂つ国分家も、弥奴国、姐奴国、蘇奴国、鬼奴国、烏奴国と呼び捨てにされた。

この奴国は、女王国の境界の尽きる国だった。その南の狗奴国は男子を王を担ぎ、邪馬台国に従わないどころか、何度も女王国に戦い挑んできた。

「倭人伝」、「倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず」、「更に男王を立つる

に、国中服せず。こもごも誅殺し、千余人を殺す、
 ここでも、狗奴国の男王卑弥呼は卑弥呼の子孫、つ
 まり天孫火瓊瓊杵だと断定できよう。

狗奴国から天降つてきて日本家を興す火明饒速日は、
 ヒミコ亡き後、その宗女で天火明美子の豊鍬入姫(トヨ)
 をないがしろにただけでなく、天照大神の御魂の八咫
 鏡を神璽に奉って日本朝を開いた。ところが素戔嗚率い
 る勢力と泥沼の抗争に陥り、戦死者千余を出した。この
 争いは、トヨを二代目女王に担ぐことで漸く落着いた。

二六五年に女王トヨが晋に朝貢した直後、彼は箸墓を
 泰山に見立てながら郊祭して天神に昇り、神璽を天璽に
 持ち上げた。「更に男王を立つるに、国中服せず」とあ
 る男王こそ、火明饒速日なのだ。

彼は生まれ育った故国や同胞を熊襲と蔑み、二七〇年
 代後半から二八〇年代前半にかけて、再三熊襲征伐に撃
 つて出たが、いずれも失敗に終わった。

「景行紀」、「十二年秋七月、熊襲反きて朝貢らず」、
 「十二月、熊襲を討たむことを議る」、

「二十七年秋八月、熊襲亦反きて辺境を侵すこと止
 めず。・・日本武尊を遣わして、撃たしむ」

「仲哀紀」、「天皇、強に熊襲を撃ちたまう。得勝ち



たまわずして還ります」

これ以前に南方や大陸からやってきた渡来人、大乱後の邪馬台国の国々について知っておこう。
縄文前期～末期に渡来した海神族は、琉球諸島から関東の沿岸部にかけて、揺るぎない地盤を築いてきた。その遠祖は、東南アジア・ヒイリピン、江南・中国の南岸地帯、南洋諸島など多岐にわたるが、漁業や航海を生業にしてきたことでは一致している。

【縄文時代の丸木舟】、縄文期に造られた丸木舟の出土例は、約二〇〇例。このうち関東一五〇（千葉県一〇〇）、琵琶湖周辺二一五が際立っている。

縄文前期（六〇〇〇～五〇〇〇年前）だけに限っても、福井県若狭町鳥浜遺跡、京都府舞鶴市浦入遺跡、島根大学構内遺跡、長崎県多良見町伊木力遺跡、埼玉県草加市の綾瀬川・千葉県多古町の栗山川流域遺跡群、千葉県市川市雷下遺跡で見つかった。舞鶴市・多古町の遺物から復元した丸木舟は、全長八尺前後とされている。

☆琉球諸島で採れる貝の装飾品が北海道南部、三陸沿岸、東京湾沿いから出る一方、糸魚川産のヒスイが北海道南部、東日本の縄文後期遺跡、近畿・九州・沖縄の晩期遺跡からも出た。
前二三〇〇年頃、黄帝や東の天帝につながる児が五帝期に流行った神国づくりを携え、北九州に渡来した。当時、東海上の海神は東の天帝傘下にあった故、彼は海神の上に立ち、福岡平野に珂那つ国を開いた。いつの頃か、東征して六甲南麓・奈良盆地などに数々の分国を配置した。

それから一五〇〇年ほど過ぎた縄文末期に、大山祇族・三嶋族、東南アジア系鱈族が渡来して海神傘下に加わり、神仙の国・蓬莱郷づくりに加わるらしい。

【玄界灘沿岸の地名】、博多近くには那珂・那珂郡・那珂川の地名があり、その北に暗黒の幽冥界を連想させる玄界灘・玄界島・玄海の地名が残る。これこそ那珂つ国や、その一門の后土の国、黄泉国があった名残であろう。

〔海神系の船〕、反り曲がった頑丈な竜骨を船首から船尾にかけて船底中央に配置し、これに横板を張り廻らせた船。頑丈で速度が出るものの安定性に欠けることで、家船には不向きだ。

この系統の船は、赤道を越えた南方の島々や、沖繩の糸満、瀬戸内海伊予側の島々で見受けられた。南洋諸島のカヌー、沖繩のサバニ、国内の伝馬船もこの系統の船だ。

糸満の漁民は、アウトリガー付きサバニや双胴サバニに乗り込み、南西諸島・奄美諸島、四国・房総・伊豆諸島、五島列島・山陰、さらにフィリピンや南洋諸島まで出向いたという。

〔宗像系の船〕、筏船のように、船底となる板を船梁に隙間もなく張りつけた船。船幅が大きくとれる上に大型船を造ることが可能だ。転覆の危険性は低いのが、荒れ狂う海では船体がバラバラになる恐れがあった。穏やかな水上で、漂いながら暮らす家舟として適していた。

この構造の船や筏船は、中国の沿岸、朝鮮半島の西南海岸から日本各地に分布しており、蛋民の家船も鐘碇系・伊勢志摩系の海女船も、五島列島・西彼杵半島や瀬戸内海の江田島・能地・二窓・豊島・多度津の近海に漂っていた家船も、この系統に属した。

前三世紀、秦に敗れた韓勢が朝鮮半島経由で大挙渡来してきた。天之国はこれと盟約して蔽之国王朝を打倒すると、唐津湾岸に倭国（日高+天之国、高天）王朝を打ち立て、その勢いで東海や北陸に侵攻して天之国流水田稲作を東方に広げた。

【宇木汲田遺跡】（唐津市）、弥生前期末から中期初頭にかけての集落跡。甕棺墓・銅劍五・多紐細文鏡一・銅戈一など多くの副葬品が出土した。貝塚から弥生前期末（二一〇〇年前）の土器、炭化米が出た。甕棺内から銅劍二・銅矛二・勾玉二・管玉二九・銅鐸舌も出土した。

次に、出雲に追いやられた中つ国、漢族の豊国、越オロチ系葦原家からなる豊葦原中つ国王朝が興り、福岡平野西の吉武・高木などに都した。

【吉武遺跡】（福岡市西区）、吉武遺跡は早良平野の南西にあって、広さは東西六〇〇m、南

北一三〇〇びもある。樋渡・高木・大石の地区から、群集した甕棺墓や木棺墓が見つかった。高木地区の三号木棺墓からは、銅鏡・細形銅劍・銅矛・銅戈など青銅器四種と共にヒスイ勾玉が出た。前二世紀の墓とされる。弥生前期の高殿と思しき大型建物址も発見された。

前一世紀中頃、豊葦原中つ国家中で跡目争いが勃発した。この時、吉野ヶ里の伊都国が福岡平野に打って出て、騒動に奔走する双方を討ち取るや、王朝を樹立して糸島平野怡土に都した。

【三雲南小路遺跡】(糸島市)、徳川期の文政五年に三雲南小路から甕棺墓が見つかった。その一号棺から、内行花文鏡など前漢鏡三五・細形有柄銅劍一・銅矛二・銅戈一・金銅四葉座飾金具八・ガラス製璧八、朱入りの壺などが出た。これと同形の有柄銅劍が吉野ヶ里遺跡からも出土した。昭和の時代に、一号棺の存在は再確認された際、一つ目の甕棺も発見された。二つの甕棺とも、三一×二一びの方形周溝墓内に納まっていた。

この中の四葉座飾金具は、王侯・功臣・属国王の死去に際して皇帝から贈られた木棺の装飾金具だった。鏡の年代・甕棺の様式・木棺の装飾具から推して、紀元前後の埋葬とされる。

この遺跡裏手に、細石神社が鎮座している。神社側の伝えるところでは、「その昔、金印漢委奴国王が宝物として伝わっていたが、江戸時代に外部に流出した」という。

〔細石神社〕(糸島市三雲)、祭神は、磐長姫と木花咲耶姫。ちなみに細石は、小石や砂利が長い年月の間に石灰質の乳液と結合し、コンクリート化した巖石(石灰質角礫岩)である。

細石を祀る古社は、鹿島神宮・籠神社・北野天満宮・下鴨神社など数多くある。

細石と言えば、「君が代」の「君が代は千代に八千代に、さざれ石の巖となりて、苔のむすまで」という歌詞を思い出す。近辺には細石神社の他にも千代なる地名があつて、苔牟須売神こけむすめを祀る若宮神社も鎮座している。志賀島の志賀海神社でも、山ほめ祭で神楽歌へ君が代きみよが歌われてきた。

〔志賀海神社の山ほめ祭神楽歌(君が代)〕、「君が代(だい)は 千代に八千代に 細石の 巖となりて苔のむすまで あればや これこそは 我君(安曇の君)の御船かや うつろうがせ・・・」

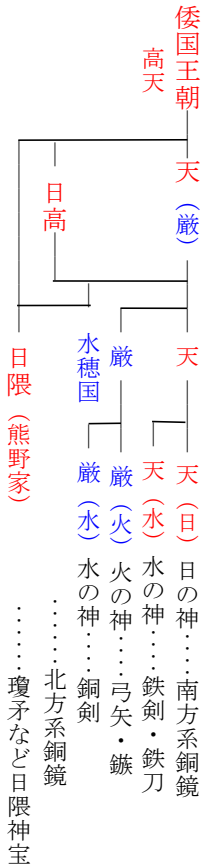
ここで、「君が代」が国歌に選ばれた経緯についても、知っておこう。

明治二年、天皇が臨席する儀式用の歌として、大山巖が『古今和歌集』の中から、読み人知らずとある歌詞の初句「我が君」を「君が代」に替えて選んだ。

明治二十六年八月に、文部省が小学校の儀式用唱歌として「君が代」を採用した。
 平成十一年、「国旗及び国家に関する法律」により、正式に日本の国家として法制化された。

読み人知らずの作者は、文徳天皇の第一皇子・惟喬皇子に仕えた木地師で、この歌が朝廷に認められたことで、藤原朝臣石位左衛門の名を賜った。もちろん、我が君とは惟喬皇子のことだ。当時、君なる言葉は広く用いられており、天皇のみを意味するものではなかったが、明治期になって国歌に採用されると、君が代は天皇の治世や長寿を祝う歌として定着していった。

話を戻そう。この王朝も一世紀前半に興る倭奴国(天地)に惨敗し、古巢の吉野ヶ里に押し戻された。その結果、糸島平野井原に天宮して女系天神を担ぐ倭奴国王朝が興った。この王朝は越才口ち族の厳勢を従えながら東海・北陸、さらに東方に支配を広げた。日隈(熊野家)は熊本平野にあつて、女系天神の身辺護衛、熊襲を手なずける役目を背負った倭奴国一門だった。



『後漢書』「倭伝」、「建武中元二年（五七年）、倭奴国、貢を奉じて朝貢す。倭国の極南界にあり。光武、賜うに印綬（志賀島から出土した金印「漢委奴国王」）を以つてす」

【鍮溝遺跡】（糸島市）、三雲遺跡から南へ一〇〇^ミ離れた水田の中にあつた墓。そこから、後漢の方格規矩鏡二面以上、鎧の札・鉄刀・鉄戈、巴形銅器三が出た。この方格規矩鏡の様式は後漢初期のもので金印を授かつた頃に近い。ならば、初代天神の墓ではないか。

一方、この王朝配下に組み込まれた伊都国は、吉野ヶ里の外濠拡大、内濠掘削、内濠内居住区の造成を強いられ、そこに乗り込んできた天之国の王族や将軍に口うるさく指図されたが、外国との交渉ごとに長けていたことで、引き続きこの役目を担ってきたらしい。

以上から、三雲南小路遺跡、細石神社、海神本家、『後漢書』の倭奴国、金印「漢委奴国王」、鍮溝遺跡、吉野ヶ里遺跡の有り様は、伊都国王朝終焉と倭奴国王朝誕生に深くかかわつてきたと睨んだが、どう思われるだろうか。

この頃、パルティア国（安息国、ペルシヤ）から安曇族が渡来し、海神に傘下入りした。彼らは筑前国志賀島を根城にして、短期間に豊後の海部郡、隠岐の海部郡、出雲大社町、丹後の余謝郡、播磨の揖保郡安曇、阿波の海部郡、摂津の安曇江、近江の伊香郡安曇郷・高島郷、美濃国厚見郡、三河の渥美郡、信濃の安曇郡、伊豆・熱海に乗り出し、その地その地で海神を奉つてきた。倭奴国王朝建国当初から大乱前までの百数十年間、その領域は、「記紀」に記されている。

「伊弉諾紀」、「淡路洲を以て胞として、大倭豊秋津洲を生む。次に伊予二名洲。次に筑紫洲。次に隠岐洲と佐渡洲を双生む。次に越洲。次に大洲。次に子洲」

「伊邪那岐記」、「伊豫二名島は、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。伊豫国、讃伎（讃岐）国、粟（阿波）国、土左（土佐）国。・筑紫島も、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故、筑紫国、豊国、肥（火、日）国、熊曾国」

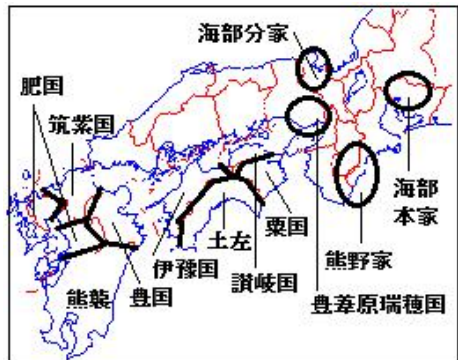
一六〇年代後半になると、天竺のマガダ国王子が江南の天台山を經由して出雲に飛来し、瞬く間に豊葦原中つ国王にのし上がった。王子は天台山では山王、出雲では所造天下大穴持・佐太大神・大国土・牛頭天王・石神、神皇産霊・国常立・天御中主と称した。

その後、伊弉諾の養子となつて熊野櫛御氣野・御饌津神、次に向津姫に婿入りして豊受（天照）皇太神・月神・月読命と語つたが、一八〇年代中頃、義父伊弉諾に叛いて邪馬台国を興し、天照大神・水天神・天叢雲・倭大物主・大蛇・豊受大神、高皇産霊など次々と名を使い分けた。

☆一四八年にパルティア国太子の安世高、ついで一六七一年頃に月氏国のシルカセンが洛陽にやつて来て仏教を伝えた。互いが仏典や経典を競つて漢訳したことで、洛陽を中心に中国風仏教が広まった。この他、竺仏朔・安玄・支曜・康猛詳・曇果らが漢訳にたずさわつてきた。

安姓はパルティア人、支姓は月氏、曇は梵語の法の音からとつた漢字でインド僧も意味した。この王朝は黄巾乱が起こる一八〇年代中頃つまり伊弉諾期に、副都を治める皇太神や三輪大物主の反乱に見舞われた。勝利した皇太神は天照大神と語つて邪馬台国を建て、唐古に都した。

【唐古・鍵遺跡】（奈良県田原本町）、中期中頃、三つの住居区の周りに環濠が掘られ、五〇〇×四〇〇びの住居区となつた。内側の環濠は幅八び以上、その外側に幅四〜五びの環濠が四〜五重に巡る。中期後半の土器には、宮殿らしき楼閣が描かれていた。



一方、敗れた伊弉諾一派は日向に逃れた後、山間の高千穂郷に押し込まれた。名ばかりとなった倭奴国王朝一族も、糸島平野平原に押し込まれた。早く言うと、倭奴国王朝は瓦解したのだ。

【平原墳丘墓】(糸島市)、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭大刀一本とともに、破断された四二面分の鏡(方格規矩鏡三五、四六・五^{サビ}の国産内行花文鏡五)などが出た。そこには、三角縁神獸鏡は一枚も存在しない。

この墓は畿之国の称える方形墓に副葬品として内行花文鏡がやたらと添えられていたが、これとは別系の天之国祭器である鉄剣・数多の方格規矩鏡も出土した。墓の築造時期は、倭国大乱から二〇〇年過ぎとする見方が有力だ。調査主任だった原田大六氏は、副葬品の内容から推して女性の墓と見なしていた。

二九〇年代末、日向から東征してきた神武軍は、大倭に攻め入って磯城一帯を制圧すると、真先に日本家を取り潰した。ついで邪馬台国を思いのままに操ってきた三輪氏、大神(大三輪)家、大倭(大日本)家の祭殿を跡形もなく破壊して、その先祖祭祀を永久に禁じた。

海神の配下として、伊予大三島・攝津三嶋・伊豆三島に割拠した大山祇神一族は、大乱時に伊弉諾ともども熊襲に逃れたが、天照大神の命令で伊弉諾嫡子の蛭兒を大倭に送り届けた大功から、淀川中流域の三嶋鴨家当主に返り咲き、更に摂津の渡し神や塞さいの神なる誉れある大役も賜った。後世、それが仇となり、子孫らは東征軍に執拗に追尾され、伊豆諸島に逃げ込む羽目になった。安曇本家も海神に追隨して東征軍に立ち向かったことで、その多くが取り潰された。残る一族は海神三神に乗り換えたり、分家の穂高家や海部氏を頼るなどして生き延びた。

大乱前後の海神族は、邪馬台国方と南国に引き裂かれた。邪馬台国に加担した海神本家は神武東征阻止に奔走し、南国方に組した分家海神三神は東征軍に参軍して邪馬台国を討った。結果、

海神の本案筋はお家断絶に追い込まれたり、海神三神の祭祀を強いられるなどした。

博多や摂津住之江の住吉大神に追隨した住吉族も、同様の悲運に見舞われた。神武東征から大和朝廷成立時にかけて、本案筋の多くが生きのびる道を断たれた。

海神の右腕だった鰐族本案は東征軍に徹底抗戦したことで、大方が滅ぼされた。生き残った鰐族は、東北に逃げる他なかった。この本案に代わり、火火出見配下の鰐族が和邇氏と称して湖西の地を拝領して大和朝廷に仕えた。大乱前後の鰐族が権勢を誇った様子は、以下から見取れる。

『古事記』の「隠岐の鰐と因幡の白兔の物語」、「記紀」の「火火出見が八尋鰐や一尋鰐魚に乗って海神宮に行き来する物語」、「火火出見の妻となる豊玉姫が八尋鰐と化して出産する話」、「備前国風土記」の「海の神である鰐魚が川を遡上して世田姫の許に通う説話」等々。


邪馬台国勢の風俗は、押しなべて南方的だ。裸足と手づかみする食事も、インドのそれに近い。

「倭人伝」、「男は顔や身体に入れ墨を施し、盛んに海にもぐって魚貝を取る。入れ墨は鮫などを寄せつけないためだが、今では氏族や尊卑の区別、身体の飾りとして使われている」、

「倭人は下半身に腰布を巻き、上半身が裸体のまま裸足の生活をして、手づかみで食事する。彼らの風俗、衣料、武器類は、海南島（広東省）のそれと同じだ」

☆当時の南中国では、海に潜り、魚を捕って食べる習慣は日常的に見られたが、北の黄河中流域では少なかったという。蒙古では、魚を神と見なして捕えることすらしなかった。

『日本人のルーツ』加治木義博著（カララブックス）によると、「インドシナ、タイ、ビルマでは、入れ墨・短弓・たすき・ぞうり・三味線・高床式住居・千木・鳥居など日本文化と共通する風俗が今も見うけられる」とのことだ。言語面でも、日本語は東南アジア・フィリピン・タイ・ビルマの山岳地帯に広がるオーストロ・アジア語と共通する単語が多いとされる。ただし、文法は一致しない。日本語と同じ文法の言語としては、蒙古語・朝鮮語・タミル語などがある。

◇熊族／熊會（熊襲）の遠祖  那珂つ国時代の熊族

熊會（熊襲）↓楚の渡来人と熊族が合体し、熊襲の肥後・日向・薩摩・大隈に割拠

倭国王朝期、倭一門の日隈（熊野家）に傘下に入りし、倭国王（倭王）を親衛

①前四三〇〇年頃、日本列島に渡来した黄帝一門は、神仙の国（神国）・那珂つ国を建国して福岡平野に都するや、東西南北四方に忠臣の四力国を配置して国邑を守ってきた。

その四力国とは、土の神を称えて后土末裔と自負する北の黄泉国（閩見国、玄界灘沿岸）、地の神を祀って黄帝一門と称する東の杵築国（大分県、国東地方）、

火神を奉って炎帝（神農氏）子孫と語る南方の火の国・その配下の熊族（熊本平野以南）、そして水の神を信奉する西の海神国（九州西北の沿岸／筑紫平野）だった。

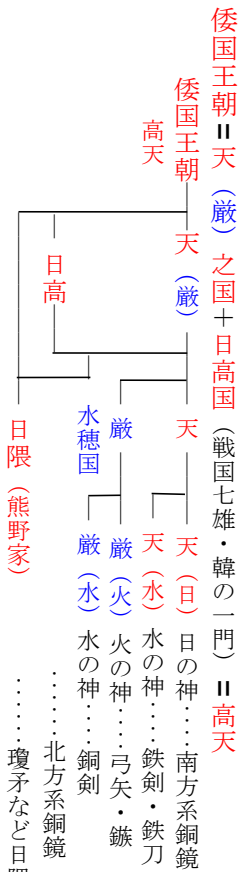
★前五世紀、呉の太伯ら子孫が大挙して琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸にたどり着いた。彼らは菜畑や曲り田などの湿地帯に分け入って水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇って太陽（日）になったと信じ、先祖祭祀に入れ込んできた。いつの頃か天之国と称して、日の鏡三面でもって祖霊を日の神として奉っていた。そうする中で、熊本平野の熊族が擦り寄ってきたことで、福岡平野の那珂つ国にじわじわ近づいていった。その後は天地なる国体の下で、那珂つ国に寄り添いながら行動してきた。

★前三三四年ころ、禹や夏后帝小康の末裔とされる越国が楚に滅ぼされた。祖国を失った越オロチ族の本家筋は、東海上に浮んで琉球諸島沿いに北上し、薩摩半島に襲来するや、瞬く間に足がかりを築いた。そこから北進し、那珂つ国の都する福岡平野に怒涛の如く押し寄せてきた。結果、那珂つ国と天之国はあっさり負けてしまい、那珂つ国は閩見国や杵築国ともども辺境の出雲に追いやられ、国の名を中つ国と改名させられた。一方の天之国は、オロチ族の配下に組み込まれた上に、越流の米づくりを強いられてきた。

倭は東海や北陸に領土を広げる一方、日高と天之国からなる分家・日隈家を興して都近くに侍らせ、これに倭王である日の神の警護、熊本平野以南の開拓も背負わせてきた。その上で、三家による支配体制に切り替えた。その際、日隈王に玉飾りのついた瓊矛（沼矛）を授与して、「王朝守護の詔があった時以外は、いかなる理由があろうとも戦さをしかけるでない。矛を逆さに持ったままで動くでない」と厳命してきた。

当初の日隈は、日高や天（厳）の称える周王朝より古の周にならって熊を崇拝動物と定めたり、日の神を真つ先に祀るなどして周の末裔に成りきる努力を重ねてきた。

熊本平野に本拠を構えた日隈は、在郷の熊族を丸ごと抱え込んだことで、熊族が縄文期から奉じてきた日の鏡・熊の神籬・葉細の玉・足高の玉・赤石の玉など熊族神宝を譲り受け、日隈神宝として奉ってきた。こうした経緯から、日隈は熊野家とも日隅とも呼ばれた。瓊矛も逆矛の名で知れ渡っていた。



前二〇年頃成立

☆日の神を祀る場では、倭王は祭壇前の玉座（日前）、日高王は倭王左のやや高い座（日高）、天（厳）王は倭王背後ながら正面の座（日向）、日隈王は最後列隅（日隈）に畏まって控えた。
 ☆後世、南九州に留まった日隈（熊野家）一派は、熊曾（熊襲）と呼び捨てにされた。

◇王朝の変遷

I 那珂つ国 (五帝期黄帝の一門) 地(神) 十后土の国 (黄泉国) ↓福岡平野に都す……前二十四世紀

II 那珂つ国 + 天之国 (太伯/呉王夫差の子孫、天(太陽) / 日の神を崇拜) 地(神) ↓福岡平野に都す……前五世紀中頃

III 蔽之国王朝 (夏后帝小康/越王句践の子孫) 地(神) ↓福岡平野に都す……前四世紀後半

一門を各地に策封↓吉野ケ里(伊都国)、吉備(?), 出雲(佐太国)、摂津(小千族)、奈良盆地(三輪オロチ、三輪氏)、北陸(越のオロチ、越智氏) 那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

IV 倭国王朝 地(神) 之國十日高国 (韓一門) 地(神) 高天 ↓唐津湾岸/福岡平野に都す……前二二〇年頃

V 豊葦原中つ国王朝 地(神) 豊国 (漢一門) 地(神) 十葦原家 (蔽之國一門) 十中つ国 ……前二世紀後半

VI 伊都国王朝 地(神) 吉野ケ里の越オロチ族 十大倭家? ……前一世紀中頃

↓吉野ケ里から福岡平野の春日に乗り込み、糸島平野(怡土)に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

VII 倭奴国王朝 地(神) 倭 (高天) 地(神) 十豊葦原中つ国 地(神) 天地 ↓怡土に天宮(天上の都)す ……一世紀前半

倭国大乱 倭奴国王朝 ↓三つに分裂 ……一八〇年代中頃

副都オロチ勢・豊葦原瑞徳国 倭・日隈・大山祇神ら中つ国勢 豊葦原中つ国

邪 蔽之国王朝 (纏向宮) 高天 天之国王朝 (高千穂宮) 出 素戔嗚 ↓豊葦原中つ国建て直しに失敗

馬 天 (蔽) 之国王朝 投馬 日前 (日前、狗奴国) 大己貴 (素戔嗚の児) ↓葦原中つ国再建

台 日本王朝 熊襲 和王朝 (高千穂宮) 雲

神武 (和王磐余彦) 東征

VIII 大和朝廷 和が豊葦原中つ国・日本・大倭・蔽之國など併合 ↓橿原に都す ……二八五年〜二九〇年代末



畿内

畿内

日向

出雲

◇ 「記紀」系譜の復元Ⅱ 「記紀」本来の王系譜

前五世紀から倭国大乱前まで、那珂つ国と天之国、オロチ敵之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が続いた。大乱後、南九州に逃れた倭奴国末裔が邪馬台国と覇権を争った末に、大和朝廷を打ち立てた。

ここに至る間、神仙の国（神国）・常世づくりなど魂の再来、古の善政再現、水田稲作、孫子の「戦わずして勝つ」の実現にしのぎを削ってきた。それらが織り重なって流転する様子は「三国志」をはるかに凌駕して、世界中に誇れる歴史だったが、大和朝廷と「記紀」編者らは、

神武—崇神—応神とあるべきところに、神武—崇神の間に大倭（大日本）王八代（綏靖）開化を挟み、崇神—応神の間に垂仁・景行・成務・仲哀の邪馬台国王四代を割り込ませ、皇統万世一系に創り変えたのです。本書の王系譜は、「記紀」の随所に潜んでいる矛盾や改ざんを洗いざらい探し出して、本来あるべき姿に正したもので、国宝に指定された海部氏系図と合致します。

ここから、倭奴国王朝、即ち天地の誕生秘話、倭国大乱が起こる経緯、大乱を仕かけて邪馬台国を建てた張本人、倭女王ヒミコは誰か、邪馬台国の歴史は如何に、大和朝廷成立の経緯は、大和朝廷を開くのは誰か、等々がくつきりと浮かび上がってくる。

これらをつなぎ合わせて歴史物語風に表現すると、こうなる。

「大乱後、倭奴国王朝が瓦解して、畿内大倭にオロチ敵之国王朝を再現した天照大神率いる邪馬台国と大倭国、南九州に日神の天照大御神が高千穂宮に天都した高天（天之国）が並立した。

二二〇年代前半、日神は高千穂宮から大倭の纏向上之宮まきむくかみに遷座して邪馬台国の女王（倭女王）に立つや、オロチ敵之国王朝を天（敵）之国王朝に模様替えした。晩年（二四〇年代末）になると、火瓊瓊杵の児・海幸彦を日向から招いて日本朝を興すように促し、自身は夫の天照大神御霊

を祭祀できる聖地を求め、伊勢国五十鈴の川上に遷った。以後、畿内勢は南国勢を熊襲、狗奴国と蔑んできた。双方は合従したり、攻め合うなどしながら覇権を争った。

五〇年後の二八〇年代中頃、高天を継承した磐余彦が日本打倒を掲げて、東征を決意した。十数年後の三世紀末、磐余彦率いる東征軍は、大倭の磯城に雪崩れ込み、ついに日本朝を討った。

三〇一年元旦、磐余彦（神武）は大和朝廷を開いて初代天皇に即位すると、大日本（大倭）直系の崇神を太子に、実子の応神を次の太子に指名した。ここに、晴れて倭奴国王朝再興が成った。三〇四年の春二月、神武は鳥見山中の霊時で郊祭して、日神夫妻を高祖皇宗に奉った。

よって本書は、火火出見——神武（始馭天下之天皇）……崇神（初国知らしし天皇）……応神とつなげた次第だ。以上から、「記紀」系譜を復元すると、本来あるべき王系譜はこうなる。

〔記紀系譜〕 皇統万世一系の王系譜

神代

日神の天照大御神——火瓊瓊杵……火火出見——神武

前660年頃

（磐余彦）（大日本王八代）

四世紀

——垂仁——景行——成務——仲哀——神功——応神

〔「記紀」本来の王系譜〕 本書の王系譜

大乱（一八四年頃）

日前（二二五年頃）和国（二八〇年頃）神功

三〇一年

和国と大倭国が大和朝廷樹立

〔高天系〕

日神——火瓊瓊杵……火火出見——神武（磐余彦）……崇神……応神

〔大日本国〕

綏靖——孝靈——孝元——開化——崇神……始馭天下之天皇 初国知らしし天皇

〔邪馬台国〕

（倭王・天神）垂仁（饒速日）……

（都督・倭王）

景行……

（都督）

成務・仲哀……

（2トヨ）豊鍬入姫

3 倭迹迹日百襲姫

神功

（倭女王）

1 ヒミコ

2 トヨ

3 / 4 神功

5 倭（迹迹）姫

185年(倭国大乱勃発) 210~230年 250~270年 285~300年過ぎ(301年は辛酉年)
 (本書の王系譜) 饒速日(天孫、先代旧事本紀の饒速日) ※……養子

伊奘諾:

日神

忍穗耳

火瓊瓊杵(天孫)

火スセリ

火照(海幸彦、火明、火明饒速日)

神功

磐余彦(神武)

武振熊(神功の將軍)

天村雲 | 天忍人(倭宿禰)

倭女王

1ヒミコ

2トヨ

3/4神功

5倭姫

(3倭迹迹日百襲姫)

【邪馬台国の王系譜】

垂仁(饒速日/天火明/火明饒速日の三代、在位99年)

景行

成務:仲哀:

神功

復元したこの王系譜では、「記紀」のおかしな話や矛盾だらけが自然と消滅する。百歳以上の年齢を重ねた神武、崇神、景行も、六百歳の倭姫も二六〇歳の武内宿禰も、せいぜい六〇代り八〇歳止まりでしかない。矛盾だらけが揃って消滅するのは、本書の王系譜が正しいという証拠だ。これからわかるように、「神」の諡のつく付く天皇、及び二人の「始馭天下、初国知らしし」天皇をつなぎ合わせた、神武:神功:崇神:応神と続く系譜こそ、「記紀」本来の王系譜なのだ。

これと司馬遷の信念、和辻哲郎氏の説の下で、「記紀」などの資料、「倭人伝」など中国史書、各地の伝承、神社の縁起、地名の由来、考古学成果、中国・インド・西アジアの歴史・宗教・習俗に基づきながら、古代史の謎を総体的に検証して解明し、それをつなぎ合わせて長編の歴史物語に組み上げました。同時に、そのつど謎を検証できるように綴りました。言わば、量子物理学の解法である帰納法にならない、大系的かつ長編の歴史物語を通して自説の立証を試みた次第です。この歴史物語に至るまでの紆余曲折した道のりを、今から一步一步着実に辿って行きたい。

◇司馬遷の信念

日本の上古を切り開くのは、南方や大陸からやって来る渡来人だ。それぞれが固有の宗教・伝統・風習とともに歴史・神話・伝説を引きずりながら、時には反目し、時には手を携えるなどしてこの島国で生き抜き、日本の歴史をつくりあげてきたのだ。

その中国では王朝が再三入れ替わることから、古い歴史を反映するはずの神話や伝説が断片的にしか残らず、しかもこっけい話が多いことから、歴史事実から外されてきた。

だが、その一部が我が国にしっかりと根づいており、「記紀」神話や伝承、地名、風俗・風習、さらに歴史そのものと深く結びついてきた。それを根拠の無いつくり話とか単なる言い伝えと切り捨てる前に、日本の古代史とどう符合するのか吟味しなければなるまい。

司馬遷の言を借りると、「総じて、上古のことを伝える書経（五帝と周の王者の言辭）や古老の伝承から、あまり離れていないものが真実に近い。それに深く思いを巡らし、心にその意を知ること、そのことが大事なのであつて、伝えられてことは決して虚言ではない」ということになる。

☆ヨーロッパでは、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』にある物語は、古代の伝説と決めつけられたが、十九世紀になってドイツの素人学者シュリーマンがトロヤの大城壁都市とともにおびただしい財宝を探しあてるに及んで、記述どおりに史実と判明した。

☆中国でも、司馬遷の書き残した『史記』『殷本記』は、神代と歴史時代を結びつけるための作り話に過ぎないとされたが、二十世紀に、王国維が甲骨文字を解読し、ついで殷の宮殿跡や陵墓が発見されたことで、「殷本記」にある事績や十数代にわたる王名が真実と判定された。これに加え、和辻哲郎氏の説（大正九年発表）も頭の中に叩き込んでおく必要がある。彼の考

えは古代史の本質を大所高所から見渡しており、大筋のところでの射ているからだ。彼の考

「皇室の発祥が大和であったなら、畿内勢の祭器だった銅鐸は大和朝廷や皇室の祭祀や文化の中

に何らかの形で残っていて然るべきだが、銅鐸は山中に打ち捨てられた形で見つかる。

一方、北九州系の鏡・劍・玉は皇位の印しとなり、副葬品として古墳に埋納されてきた。このことは、北九州勢が畿内勢を打ち破ったことを物語っている。

ならば戦前の教育で、昭和初期の若者が頭に叩き込まれて疑うことのなかった皇国史観、皇統万世一系、統一国家論や、戦後の学校教育の場で擦り込まれた戦前とは真逆の「倭では都市国家程度の百余国が分立して、これを束ねる王朝などなかった」とする説は、いずれが正しいのか、更に言うなら、戦前も戦後も漫然と踏襲してきた「記紀」神話の解釈や王系譜、

神代七代 神代

伊弉諾—日神の天照大御神—火瓊瓊杵—火火出見—

前660年頃

神武—綏靖—開化—崇神—垂仁—景行—成務—仲哀—応神

〈磐余彦〉〈大日本王八代〉

〈邪馬台国四代〉

は、信頼するに足るのか。こう問われると、どれも否と答える他にない。この根拠を列挙したい。その一つ。戦国中国で、覇権を争ってきた呉・越・楚・韓などの末裔がそれぞれの宗教、伝統文化、風習・風俗を背負って、わが国に渡来したことだ。現に、わが国のありとあらゆる箇所とその痕跡が今に息づいている。『晋書』や『魏略』逸文も、こう伝える。

「倭人は、呉の 太伯（周太王の長男、姫氏）の末裔と自ら言う」

二つ目は、弥生初期に水田稲作の拡大とともに北九州の遠賀川式土器が若狭・東海地方まで広がり、そこから銅鏡・鉄刀、銅鐸、銅劍、銅矛が多々出土すること、また出雲の荒神谷から銅劍・銅鐸・銅矛が一緒に出た事実だ。それらは、青銅祭器を崇める王朝が先祖祭祀を通して一族や配下を束ねてきた小道具ではなかったか。

この視点から、『前漢書』『地理志』、「楽浪海中に倭人あり 分たれて百余国となり 歳時を以て来たり」の記事に思いを馳せると、当時の統一国家が百余国を統治したと見るのが自然だ。

ならば、『後漢書』、「建武中元二年、東夷の倭奴国、貢を奉じて朝貢す」にある倭奴国は、倭の

これに模して造った神剣を吉備の石上布都魂神社に寄進されたという。

以上、何が言いたいかと言うと、伊弉諾は素戔嗚・大己貴の二代前である故、銅矛天瓊矛や鉄剣十握剣は、纏向時代をさほど遡らない時期の祭器と見ても、何ら差支えがないということだ。

その五。「伊邪那伎記」「天地初めて発けし時はじめ」、「伊弉諾紀」「天地の中に」、「古語拾遺」あめつちひら「開闢はじめの初に」とある天地は、何を意味するのか。いつ頃か、後ほどしかと突き止めたいと思う。

その六。神武天皇が即位後四年に、鳥見山山中にまつりのにわ靈時を設け、そこで柴を焚きながら郊祭して皇天（天照大御神と高皇産靈）を皇祖皇宗に奉ったことだ。これと符合して、鳥見山山中には被葬者の名もわからない巨大な日向型前方後円墳、桜井茶臼山古墳が鎮座している。

そこには、樹齡千年以上の巨木からなる木棺が安置されていて、その内外に二十六面の三角縁神獸鏡をはじめ、内行花文鏡・方格規矩鏡・画文帯神獸鏡・獸帶鏡など八〇面以上の銅鏡、それに三種神器である曲玉・鉄剣、さらに王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉が副えられていた。近年の再調査で、三世紀末から四世紀初めに築造された古墳と断定された。

上記から、神武が桜井茶臼山古墳で郊祭した時期や神武即位年が判明する。ここを起点にして、ヒミコは誰か、大乱の時期、天地開けし時、「記紀」本来の系譜が芽づる式に浮かび上がってくる。その七。籠神社の海部氏系図を検証すると、神武と神功が同時代に生きたことや、神功が神武の妃だったこと、応神がこの夫婦の実子であるのは明白だ。これについては、詳細に後述したい。

戦前の皇国史観や戦後の「倭では都市国家程度の百余国が分立した」とする考えの下で、古代史の常識・通説を検証すると、いずれの場合も謎が謎を呼んで噴出する一方だ。邪馬台国史の全貌がとんと解明できない原因は、「記紀」の随所にある矛盾や改ざんを素通りしてきた上に、矛盾だらけの皇統を正さなかった怠慢にある。一から考え直し、再構築する以外にありません。

して逆算しても、一八〇年以降に落ち着く。

その日神は、天孫降臨直後から高天の原での消息がぶつとりと途絶えた。その後、ヒミコが女王に共立されて邪馬台国に君臨し、二四〇年代末に逝った。その歳は長大とされる。

天照大御神がヒミコに転身したとすれば、合わせて六十年近い在位、享年も八十余歳となる。それであるなら、日神が畿内に遷座して、倭女王に転じたと思なしても何の不思議もない。

⑤ 天地に関する記述は、「伊邪那伎記」、「伊奘諾紀」、「古語拾遺」にある。ここから、天地開闢の頃は伊奘諾の七代前、つまり神代初代の国常立、別天つ神の天常立神の御世と思なせる。

「伊邪那伎記」、「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。・・次に成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神、次に

天之常立神。上の五柱は別天つ神。次に成れる神の名は国之常立神。・・次に於母陀流神、次に伊邪那岐、妹伊邪那美神。(国之常立神以下、伊奘諾・伊奘冉まで、神代七代という)」

「伊奘諾紀」、「開闢くる初に・・天地の中に一物生れり、神となる。国常立尊と号す」

⑥ 伊奘諾から一代二〇年として逆算すると、神代初代の国常立、別天つ神の天常立の御世は、一世紀前半、即ち光武帝が漢朝を再興した頃や倭奴国が漢に朝貢した頃に合致する。ここから、

天地に倭奴国、更に国常立・天常立は倭奴国王朝を興すなり、漢に朝貢したことが見て取れる。

『後漢書』「本紀」、「二年(五七年)春正月辛未、初めて北郊を立て后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す、

「倭伝」、「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝貢す。倭国の極南界にあり。光武、賜うに

印綬を以ってす

⑦ 神武即位が三〇一年ならば、これに続く、綏靖く開化の大倭王八代の系譜も、さらに纏向遺跡と同時期の垂仁―景行―成務―仲哀の系譜も、神武即位以降であろうはずがない。どう見ても、垂仁・景行の御世は纏向遺跡の時代すなわち邪馬台国時代でしかない。

⑧ 以上を整理してまとめると、このようになる。

天地 倭奴国王朝

倭奴国王朝の成立時期 光武帝が漢朝を再興した一世紀前半

創建者 神代初代の国常立、別天つ神の天常立

伊奘諾の御世 一六〇〜一八〇年代

倭国大乱 伊奘諾期の一八〇年代中頃に勃発した天下分け目の戦い。畿内の邪馬台国が勝利日神の天照大御神 倭奴国王朝天神の宗女。高千穂宮から大倭に遷座して、女王ヒミコに共

立された。その御世は、高千穂宮に天宮した時代が一八〇年代後半〜二二〇年代前半、

女王としての在位が二二〇年代前半〜二四〇年代末で、合計して六十年近くに及んだ。

大和朝廷の成立時期 磐余彦が三世紀末に日本朝を討ち、三〇一年元旦に樹立

大和朝廷の初代天皇 神武天皇（磐余彦）

綏靖く開化の大倭王八代 伊奘諾―日神の天照大御神―〇―火瓊瓊杵：火火出見―〇―神武

に続く王系とは別系

垂仁、景行 伊奘諾く神武に続く王系とは別系。その治世は三〇一年の神武即位以前つまり

邪馬台国時代でしかない。はっきり言うと、彼らこそ、邪馬台国王なのだ。従って、

伊奘諾―日神―〇―火瓊瓊杵：火火出見―〇―神武―綏靖く開化―崇神―垂仁―景行―成務―仲哀―応神

と続く皇統万世一系の「記紀」系譜は、どこから眺めても成り立つわけではないのだ。

大倭に日高見国を立てた天火明も誉津別（火火出見）をこしらえた。皇子らが成長すると、女王は天孫二人に「両家の嫡子は相手の家に養子入りし、家の絆を揺るぎないものとせよ」と命じた。その結果、火折が大倭に天降って誉津別に成りすまし、火火出見は火瓊瓊杵の養子に入った。

二二八年、絶頂期にあったヒミコは、魏の都に使節を送った。同じ頃、火照（海幸彦）と火火出見が日前の太子の座を巡って争い始めた。敗れた海幸彦は、命乞いして火火出見に謝罪した。二四〇年代後半、天火明（二代垂仁）が女王の座を奪いにかかったが、失敗して常陸に走った。直後、ヒミコは火瓊瓊杵と和睦し、その児・海幸彦に火明と饒速日を襲名させ、上洛を命じた。

二四〇年代末、ヒミコが逝くと、彼は纏向に日本王朝を立て、前王朝をこれに組み入れた。二六六年、二代女王トヨ（豊鍬入姫）が晋に使節を遣り、朝貢した。その直後、火明饒速日はヒミコの墓（箸墓の円壇部↓円墳に改築）を前方後円墳に造り変えるや、泰山に見立てて封禅し、天神天照国照彦火明饒速日（三代垂仁）と語って倭奴国王朝再現に努めた。一方で、火火出見との誓約を消し去りたい一心から、景行に熊襲征伐を下命した。だが景行は惨敗し、幽閉された。

二八〇年代前半、仲哀・日本武・神功は、天神から熊襲征伐を詔されて遠征したが、大敗した。その時、亡き祖父・火火出見の和国を継いだ磐余彦は、その名と遺志を継ぐや、東征を敢行した。十余年後、磐余彦が磯城に侵攻して日本軍を撃破すると、饒速日は宝器を差し出して降伏した。この間、女王は、トヨ↓倭迹迹日百襲姫↓氣長足姫（神功）↓倭姫と続いてきた。

三〇一年元旦、磐余彦（神武）は、橿原に都する大和朝廷を開き、初代天皇に即位した。その際、饒速日の児・可美真手を物部氏と語らせて軍事筆頭職に任じ、朝廷・宮殿の守護を厳命した。ここに、日神が願望してきた倭奴国王朝再現に加え、火火出見・海幸彦の誓約が実現した。

三〇四年二月二十三日、神武は鳥見山中に斎場（桜井茶白山古墳）を造営して郊祭し、皇祖天神（日神夫妻）を天に配して皇祖皇宗に奉った。併せて伊勢に宗廟を開き、皇祖天神を奉った。

◇邪馬台国の興亡史概略

①倭国大乱(一八〇年代中頃) ～一九〇年前後～二二〇年

豊受皇太神(向津姫の入婿)、副都唐古(奈良県)で反乱してオロチ敵之国王朝を再現(邪馬台国)

↓天照大神と語る↓怡土に天宮する六代女系天神・天之尾張神、伊奘諾に東方建て直しを下命

↓伊奘諾、宮津・沼島に仮宮し、東の制圧に乗り出したが、島根半島の闇見国(黄泉国)で天下

分け目の決戦に大敗↓邪馬台国、西征して北九州席卷

↓倭奴国王朝、倭国と豊葦原中つ国(奴国)に分裂し、崩壊

↓伊奘諾と向津姫、日向に落ちて禊払いした後、高千穂郷に遷る

↓向津姫、天照大御神に、続いて七代天神日神に昇り、高千穂郷

に天宮(高千穂宮)して天之国(高天)を再建

②一九〇年頃～二二〇年頃(天宮、高千穂宮時代)

素戔鳴、出雲で大蛇(天照大神)退治↓豊葦原中つ国再建に奮闘

↓忍穂耳、摂津の豊葦原瑞穂国に降臨しようとしたが、大己貴(素

戔嗚実子)に邪魔される↓大己貴、葦原中つ国建て直しに成功

↓素戔嗚養子の天日槍、兵八千と共に襲来したが、大己貴に惨敗

↓大己貴、播磨席卷後、越オロチ族と組んで邪馬台国を猛攻撃

↓天照大神、日神と組んで高千穂宮に赴き、高皇産霊と語る

↓天孫饒速日(初代垂仁)が大倭に降臨。一年足らずで急逝

③二二〇年代前半～ヒミコの朝貢

高皇産霊、東西から葦原中つ国に大遠征軍を送る

↓大己貴、戦わずして国譲り↓再度、忍穂耳が降臨しようとした



が、大己貴と三輪氏が猛反対
 ↓天孫火瓊瓊杵が大倭に天降つて行こうとしたが、大己貴と三輪氏が裏で妨害

↓天孫、呉軍撃退の任を担い、吾田に降臨して笠沙宮開闢

↓天孫、西都市妻（西都）に遷都

↓高皇産霊、天孫彦火明と共に出雲・丹後経由で大倭に向かう

↓天火明、大倭に日高見国建国

↓日神、大倭に向かう

↓高皇産霊、大倭で急逝

↓日神、纏向に遷座して厳之国王朝を天（厳）王朝に模様替えし、女王ヒミコに立つ↓ヒミコ、天孫両家に嫡子交換を下命

↓天火明（二代垂仁）皇子の誉津別、熊襲に天降って火火出見（山幸彦）と語る

↓二三年、ヒミコ、魏に朝貢↓火瓊瓊杵皇子の火照（海幸彦）、火火出見と跡継を巡って争う

④二四〇年代後半

火瓊瓊杵、ヒミコと対立して薩摩川内に遷都

「倭人伝」、倭女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。



↓天火明、ヒミコに謀反して退位を迫るが、失敗して常陸に逃亡↓ヒミコ、火瓊瓊杵と和陸

↓火瓊瓊杵の兄・海幸彦、火明と饒速日を襲名し、大倭に降臨↓ヒミコ、逝去

⑤二五〇年代後半（海幸彦・山幸彦の時代）→二八〇年代中頃（神武、東征出立）
 火明饒速日（三代垂仁）、日本朝を開くが國中服さず↓女王トヨ（豊鍬入姫）を立て、國中定まる

↓二六六年、女王トヨ、晋に朝貢↓直後、火明饒速日、天神に就任

↓火瓊瓊杵、逝去↓跡継の火火出見、日前を和王朝と改名し、都城市都島に高千穂宮遷都。ついで霧島市隼人町に高千穂宮遷都

↓女王トヨ、逝去↓倭迹迹日百襲姫、女王即位。数か月後に急逝

↓気長足姫（神功）、女王即位↓景行、饒速日から熊襲征伐を詔されたが、大敗して日向で幽閉、六年後に帰国↓火火出見、逝去

↓孫の磐余彦（神武）、宮崎市に高千穂宮遷都

↓仲哀・日本武・神功、饒速日から熊襲征伐を詔されて遠征

↓磐余彦、東征出立↓日本武・神功、東征軍に敗北し、帰順

↓倭姫、女王即位

⑥二九〇年代末（日本朝滅亡）

磐余彦、磯城に侵攻し、日本朝打倒↓饒速日、降伏して帰順

↓饒速日の兄・可美真手、物部氏の名を賜り、磐余彦に仕える

⑦大和朝廷の始まり

三〇一年、磐余彦、大和朝廷の初代天皇に即位

↓三〇四年、鳥見山北麓に靈時（茶白山古墳）を設けて郊祭し、

皇祖天神（天照大御神夫妻）を天に配して皇祖皇宗に奉る



◇二〜三世紀の熊襲／高天、天之国、日隈、日前、和国／投馬国、狗奴国

★伊奘諾の時代

(1) 日隈（熊野家）の伊奘諾は、六代天神から七代倭王に指名されると、日の神を祀る先祖祭祀の場でも日向、日高、豊国の神座を左右や背後に押しやり、自ら祭壇前（日前）に陣取って祭祀を取り仕切った。ついで日隈を日前ひのまえと言いつらした。これに対して、身内の倭族ですら、「日隈

が祭壇前にしゃしゃり出てきた」と陰口を叩き、日前ひのくま呼ばわりした。

(2) 大乱に敗れた伊奘諾は、向津姫、素戔鳴、五皇子三皇女らを連れて熊襲に逃げ込んだが、日向の橘小門に追いつめられ、そこで降伏の証しに褌払いした。

(3) その後、伊奘諾、向津姫らは高千穂郷に押し込まれた。そこで、倭の呼称を禁じられたことで、旧名の天之国、高天と名のつた。

★日神の天照大御神時代

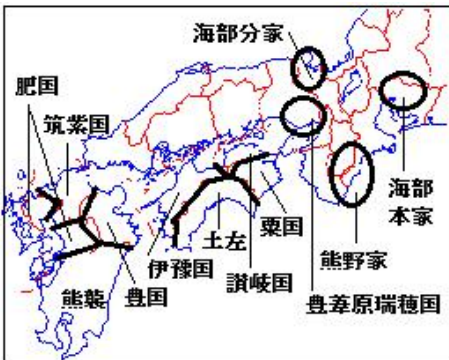
(1) 伊奘諾はその地向津姫を跡継ぎに指名し、天照大御神に担いだ
(2) 一九〇年前後、天照大御神は日天神の日神に昇りつめると、高千穂宮を天宮と定め、天上で暮らしている如く振る舞った。

(3) 二二〇年代前半、日神と高皇産霊は、天孫火瓊瓊杵に熊襲の吾田に降臨を命じた。

(4) その直後、高皇産霊は、実子天火明を連れて纏向に帰国した。夫を追って纏向に遷座した日神は、そこで女王ヒミコに担がれた。

★火瓊瓊杵の時代

(1) 日隈を従えて降臨した火瓊瓊杵は、高千穂峰麓に高千穂宮（高原



町の宮の宇都)を設けて、高千穂峰頂きに登った。その後、牛の背のような尾根を渡り歩きながら吾田に到り、その地の舞敷野に笠沙宮(加世田市)を開いた。そこで女神大山祇神・事勝国勝(鹽土老翁)夫妻の娘、木花開耶姫に出会い、大山祇神家に婿入りした。

(2) 数年後、彼は笠沙宮を西都市妻に遷すと、日隈を日前と改め、妻の木花開耶姫を呼び寄せた。以来、彼の都と国は、笠沙宮、西都、日前国、妻の国、投馬国と呼ばれた。

(3) 二二〇年代前半、女王は天孫二人に嫡子交換を命じた。その結果、天火明の児、火火出見が火瓊瓊杵に養子入りした。

(4) 二四〇年代中頃、火瓊瓊杵はヒミコと仲違いして熊襲の高城・川内(さつま川内市)に遷都した。その直後、川内城に立てこもり、選りすぐった遊撃隊を次々と北進させた。本軍も菊池平野の敵を蹴散らしながら、筑紫平野へなだれ込んだ。この時期、熊襲は狗奴国とも呼ばれた。

(5) その最中に、天火明(二代垂仁)が女王の座を奪いにかかったが、失敗して常陸に逃げた。

その後、女王は火瓊瓊杵と和睦して、その児・海幸彦に火明と饒速日を継がせ、上洛を促した。

★火火出見の時代

(1) 二四〇年代末にヒミコが逝くと、天(厳)之国王朝は火明饒速日率いる日本朝に様変わりした。

(2) 二五〇年代前半、火瓊瓊杵が逝った。跡継ぎの火火出見は、都城市都島に高千穂宮を開いた。

二七〇年代の前半、霧島市隼人町に高千穂宮を遷し、日前国を和国に改名した。

同時に、日本朝打倒、倭奴国王朝再興、日隈・日前・熊野家の再興、紀伊と熊野での先祖祭祀

復興を声高に公言し始めた。

(3) 二七〇年代後半、日本朝の火明饒速日は、景行に熊襲(火火出見のこと)征伐を命じたが、景行は日向で捕らわれ、六年間も抑留された。

「景行紀」、「十二年秋七月、熊襲反きて朝貢らず」、「十二月、熊襲を討たむことを議る」

(4) 二八〇年代前半、火火出見が逝った。

★磐余彦の時代

(1) 和国を引き継いだ磐余彦も、日本朝打倒、倭奴国王朝再興、日隈・日前・熊野家の再興、紀伊と熊野での先祖祭祀復興を唱えて、宮崎市に高千穂宮を開いた。

(2) 二八〇年代中頃、火明饒速日は仲哀や日本武に対して、再度の熊襲征伐（磐余彦のこと）を命じた。橿日宮に集結した仲哀・日本武率いる遠征軍は、意気揚々と熊襲征伐に撃つて出たが、仲哀軍は大敗して引き返してきた。日本武は配下ともども敵に捕まり、寝返った。

「仲哀紀」、「天皇、強に熊襲を撃ちたまう。得勝ちたまわずして還ります」

「景行紀」、「二十七年秋八月、熊襲亦反きて辺境を侵すこと止めず。・日本武尊を遣わして、撃たしむ」

(3) ここに至って、磐余彦は兄弟らと諮り、高千穂宮（宮崎市）からの東征を決断した。

(4) 大阪湾を出て茅渟海を南下した磐余彦は、那智と熊野を制圧して神倉山に登ると、熊野家祖霊にこう申し上げた。

「熊らは数々の不義を重ねました。よって、私と神功は熊どもから日矛も所領も召し上げます。ここに、日前鏡・日矛を共に揃えて秋月名草宮に奉りますと誓った次第です」

こうした流れの中で、紀伊や熊野での祭祀がこう決まっていった。

一、日隈・日前の再興や先祖祭祀の落ち着く先は、紀伊秋月の地

一、熊野家の先祖祭祀が落ち着く先は、熊襲・出雲・紀伊ではなくて熊野の地



高千穂宮の所在地

◇海幸・山幸彦にまつわる伝説

- ①【内之浦港】（鹿児島県肝付町）、火火出見は海神宮からの帰途、この港に入ったという。
うしおたけ
- ②【潮嶽神社】（宮崎県日南市）、火スセリ命（海幸彦）を主祭神として祀る唯一の神社。山幸彦に敗れた火照は、満潮時に船でたどり着いたこの地に宮居を定めたと伝わる。
- ③【勿体の森】（鹿児島県串間市）、海神宮から戻った火火出見が、南方に巡行する際に利用した宮跡とされる。
もったい
- ④【串間神社】（串間市）、山幸彦は猪・雉などの多いこの地で、狩に興じたと言う。その際、在郷の人々は獲物を追い込むため、櫛の歯のごとく柵をめぐらせて囲ったことで、櫛間（串間）の地名が生まれたという。
くしま
- ⑤【石体神社】（鹿児島県霧島市）、火火出見が高千穂宮を置いた正殿の跡に、建てられたという。
しやくたい
- ⑥【鹿児島神宮】（霧島市）、祭神は、穂穂出見尊と豊玉姫命。社伝によると神武天皇の御世に、穂穂出見の宮殿があった高千穂宮跡で祭祀が始まったと伝わる。北西十三キロメには、穂穂出見の高屋山陵がある。
- ⑦【高屋山陵】（霧島市）、明治政府が火火出見の陵墓に指定し、宮内庁に管理されている。霧島山山麓の杉林の中に鎮まる楕円形の円墳で、表面は多数の石で覆われているとのことだ。
- ⑧【鰐塚山】（宮崎市田野町）、山幸彦を海神宮から日向に送り届けたワニ族集団が、この山に眠っていると伝わる。

◇神武天皇（磐余彦火火出見）にまつわる伝説

①【都島、狭野】（宮崎県都城市、高原町）、鶴戸で誕生したウ草葺不合は、海神の娘・玉依姫（豊玉彦の実娘）と結婚して狭野に移り住んだ。二人の間に生まれた磐余彦は、狭野命と呼ばれて狭野神社に祀られている。

②【宮崎神宮】（宮崎市）、磐余彦の孫の建磐竜が筑紫国の鎮守となった時、磐余彦尊を高千穂宮跡に祀ったと言う。

③【皇宮屋】（宮崎市）、宮崎神宮西の皇宮神社の地。磐余彦の宮居跡とされる。

④【諸県舞】（宮崎県高原町）、狭野神社や霧島東神社では、古式の夜神楽舞が奉納されている。

この舞は諸県舞と呼ばれ、大嘗祭で演じられてきた。日向隼人と呼ばれる諸県隼人は、薩摩隼人とともに東征に従軍し、大和に都が移った後も、宮殿警護を受け持ったという。

⑤【匠が河原】（宮崎県日向市）、美々津の耳川左岸にある地名。東征軍の軍船をつくるため、多くの船大工が働いた所とされる。

⑥【立磐神社】（日向市）、磐余彦が東征の船出に際して、航海の安全と戦勝を祈願した所とされる。境内には、磐余彦が腰をかけて休んだという腰掛け磐がある。

⑦【秋風をあげる行事】（日向市）、東征軍が美々津を出航する際、天候や風向きを測るために帆をあげたという。出航日にあたる旧暦八月一日にちなみ、秋風を揚げる行事が今も続く。

⑧【起きよ祭】（日向市）、旧暦八月一日に行われる「起きよ祭り」は、東征軍が早暁に出航するため、各戸を巡って「起きよ。起きよ。お立ちだ」と呼び歩いたことに由来するという。

⑨【都農神社】（宮崎県都農市）、磐余彦が国土平定と戦勝を祈願したことに始まるという。

亡き天鹿兎山の遺児二人を天孫として押しつけられた。親元を離れたくなかった忍穗耳は、自分にて代えて天孫降臨を日神に願い出た。

(2)そこで天孫饒速日が大倭国鳥見に天降り、長スネ彦の妹を妃に娶ったが、妃の懐妊中に逝った。

『先代旧事本紀』、「時に正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、奏して曰さく、『僕將に降らむと欲い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』とまうす。詔して之を許したまふ。

天神の御祖、詔して、天璽の瑞宝十種を授く。・・・饒速日尊、天神の御祖の詔をうけて、天の磐船に乗りて、河内国河上哮峰に天降り坐し、則ち大倭国鳥見の白庭山に遷り坐す。・・・饒速日尊、便ち長スネ彦の妹御炊屋姫命を娶りて妃と為し、妊胎したまふ。未だ産む時に及ば

ざるに、饒速日尊、すでに神損去亡坐しぬ。」

(3)高皇産霊が葦原中つ国平定を決意して、経津主・武甕槌・事勝国勝ら大軍を出雲に送ると、大己貴は平身低頭して国譲りを誓った。そこで忍穗耳が再度降臨を試みたが、大己貴に潰された。

(4)代わって、火瓊瓊杵が大倭に天降って行こうとしたが、何故か逆方向の熊襲吾田に到った。

(5)同じ時期、天孫彦火明は大己貴と一緒に出雲から播磨、丹後宮津に移り、その地を統治した。

『播磨国風土記』飾磨郡、「昔、大汝命（大己貴）の児・火明は強情で、行いも荒々しかった。父はこれを憂い、遁れ棄てようと因達の神山に到り、火明を水汲みにやっただまま船を出した。火明が水を汲んで還ると、船が岸から離れていた。火明は大いに怒り、風波を起こして船に追い迫った。このため大汝の船は進むことができなくなり、うち破られた」

〔天火明の日高見国〕

①二二〇年代前半、天照大神に伴って丹後から大倭入りした彦火明は、天火明（二代垂仁）と改名して日高見国を建て、尾張の統治、さらなる東への領土拡大を命じられた。

『大祓の詞』、「此く依さし奉りし四方の国中と大倭日高見国を安国と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて皇御孫（天火明） 命の端の御殿仕え奉りて」

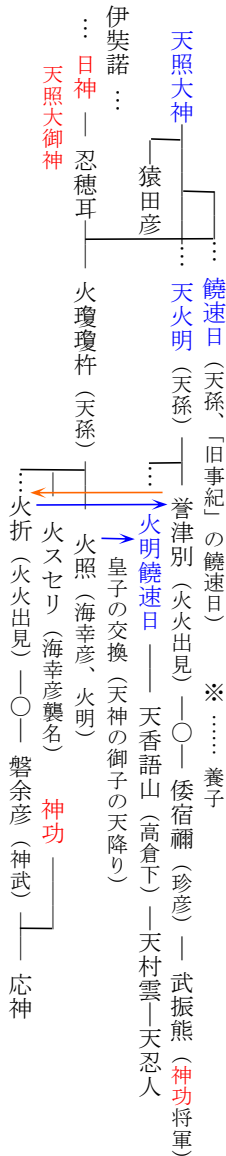
『日本書紀』、「大己貴命と少彦名（天火明） 命、力をあわせ心を一にして天下を經營る」、
 「天忍穗根尊、高皇産靈尊の子女栲幡千千姫万幡姫命を娶りたまう。而して兒天火明命を生む。其の天火明命の兒天香山は、是尾張連等が遠祖なり」

ちなみに火瓊瓊杵の兒海幸彦は、二四〇年代末、女王ヒミコの命で、火明と饒速日を襲名して大倭に天降り、天火明の家督一切を引き継いだ。勘注系図や尾張氏系譜の火明は、彼のことだ。その兒天香語山は尾張を領して東海道都督に昇り、熊野で東征軍に遭遇したが戦わずして降った。

【海部氏系図勘注系図】、始祖彦火明—兒天香語山—孫天村雲

『先代旧事本紀』尾張氏系譜、饒速日命亦名天火明命—兒天香語山命—孫天村雲命—天忍人さらに、「饒速日命亦名天火明命の兒、天香語山は天照大神の曾孫で、高倉下」と伝える。

〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕



②葦原中つ国の平定後、天火明が経津主・武甕槌・事勝国勝を率いて関東平野から霞ヶ浦周辺を短期間に席卷したことや、さらに仙台平野に押し寄せ、そこに日高見国を立てたことは、以下

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地(信太)は、もと日高見・・」④女王ヒミコは火明が謀反を企てたことで、天火明家を廃絶し、祭場での日高見国の神座を最後の立席(日立)に落とした。(つまり、先祖祭祀の場に顔を出すな之意)

一方、常陸の信太に逃走した火明・尾張・日高見一派は、そこでも日高見国と名のり、「日高見の信太こそ、天竺の教義をかなえる常陸の国だ」と言い張った。これに対して、邪馬台国方は、「先祖祭祀に同席できない日立の常陸だ」と言って蔑んだらしい。その後、彼らは常陸を追われて陸奥に走った。

「景行紀」、「二十七年の春二月、竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に、日高見国あり。・・是総べて蝦夷と曰う。・・撃ちて取りつべし。』」

⑤三世紀末、磐余彦率いる東征軍が火明饒速日の日本朝を降すと、日本武は東国から陸奥に入った。そこで、戦わずして日高見の賊首らを帰順させ、身の回りの世話をさせながら連れ帰った。

「景行紀」、「天皇、斧鉞おのまかりを持ちて、日本武尊に授けて曰わく、『東の夷の中に、蝦夷は是尤はなはだ強し。・・懐くるに徳を以てして、兵甲を煩さずして自づからに臣隷わしめよ』、

「日本武尊、陸奥国に入りたまう。・・蝦夷の賊首、嶋津神・国津神等、弓矢を捨てて望み拝みて曰さく、『仰ぎて君が容を視れば、人倫ひとに秀れてたまえり。若し神か。姓名を知らむ』とのたまう。王(日本武尊)、対えて曰わく、『吾は是、現人神の子なり』とのたまう、

「蝦夷等、みづから縛いてしたかう。故、其の罪をゆるしたまう。其の首帥を俘にして、従身へまつらしむ。蝦夷既に平けて、日高見国より還りて、西南、常陸を歴て、甲斐国に至り」

【日高見神社】(石巻市)、祭神は天照大神、配神は日本武命・竹内宿禰命。
日本武尊が陸奥に遠征した折、その偉業を崇敬して創建されたという。